

伊藤整全集

第八卷

伊藤整全集

8

新潮社版

編纂

瀬沼茂樹

平野謙

小田切進

奥野健男

伊藤整全集

— 8 —

© Sadako Itō
1973. Printed
in Japan.

乱丁、落丁本
はお取替えい
たします。

印刷所 株式会社精興社
製本所 株式会社大進堂

発行所 株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一電話
東京二六〇一一一一郵便番
号一六二振替東京八〇八

発行者 佐藤亮一
著者 伊藤整

昭和四十八年四月十日 印刷
昭和四十八年四月十五日 発行

定価二〇〇〇円

氾濫・泉

伊藤整全集 第8卷 目次

汜
濫

泉

*

編集
後記

五

三
三

瀬沼茂樹
五五

伊藤整全集第8卷（小説）

汜

濫

高分子学会の開かれている成律大学というのは、私立大学の中で経営が楽だと言われる学校であり、戦後初めて工学部を置いたので、工学部の校舎は新しかった。旧東京市内のことで、敷地には余裕がない。しかし、外濠を見下す岡の斜面に建った彎曲した正面を持った扇形の六階建ては、大変目立った。ここを訪ねて来たのは初めてだが、真田佐平はこの建物を何度も遠くから眺めたことがあった。日曜が祭日に続いた秋の日を利用して開かれた学会の今日は二日目だった。真田は街のタクシイを拾ってやって来た。車を出たところで、彼はちょっと立ちどまって眺めた。この建物の一階は八本の太い脚のような柱が立っているだけで、カー・ポートになっていた。そこは二十台ほどの車で一杯になり、あまった車は、日陰を求めるように旧校舎の前の並木の下にも並んでいた。この建物の一階の横に、白く大理石を生かした幅広い階段がある。それと並んだエレヴェーターの前には、「第五回全国高分子学会 二階」という

立看板が、寄せかけてあった。

秋の始めの強い日射しが、半ば白い真田の髪に当って光った。太り気味の五十男の真田佐平は、建物の中に入り、車の間を縫って行った。運転手たちが車の中で眠ったり、雑誌を読んだり、エンジンのをぞいて見たりしているだけで、あたりは、ひっそりとしていた。真田は急ぎ足で白い石の階段を登った。二階の廊下でも物音はほとんどないが、五つほど先の右側の室のドアが半ば開いて、室から溢れたように四五人の男がそこに立っていた。講演調で喋っている声とその室から流れ出ている。

真田は直感的に、接着剤の部会だな、と思った。化学屋の中の山師的な連中がいま手頃な金儲けの発明探しに、接着剤の畑に集って餌をさがしている。ポリエチレンの接着剤に十萬ドルの懸賞金がかげられる、というような発明狂的な空気が国際的に動いているのは、この分野なのだ。理論は、この分野では、ほとんど役に立たない。設備というものもまた、二坪の実験室で間に合うかも知れないのだ。着想とカンに自信のある連中、大会社に入り込めなかった二三流の頭の化学屋が、一旗挙げようという気持でこの分野に流れ込んでいる。その外にも、街の玩具屋などで、手頃な金属の接着剤があったらと思っている連中が、工夫の種になりそうなものを求めてやって来ている。繊維や塗料

をやっていた者も流れ込んだので、戦前にはほとんど縁のなかった研究者たちが、この学会に集まるようになり、それが発明狂や山師たちとごっちゃになっている。

真田は、自分が大学を出た頃の、人気のなかったこの畑のことを考えた。接着剤、塗料などは研究者の少い、目立った進歩の見られない畑であった。船底塗料には船会社や軍部から大学へ研究費が出ていたが、特に目立った業績を作り出せるものがなかった。接着剤の畑では、長い間、ニカワ、大豆蛋白、牛乳カゼイン、コンニャク糊などが研究の対象だった。昭和十九年、日本軍はコンニャク糊の風船に爆弾を結びつけてアメリカ大陸まで飛ばした。その時、真田は、母校の教授をしていた久我象吉の推薦で助言役に引き出された。真田は大学生時代から「ノリ屋さん」と言われていた。静岡県で小さな合板工場を経営していた父の仕事を継ぐために、彼は学生時代から、大豆カゼインの研究を少しずつしていた。しかし、その工場は破産し、彼は苦学して大学の後半を終え、三立化学という小さな会社へ入ったのだ。

真田はその室に向って靴音を立てぬように歩いて行きながら考えた。高分子学会か。立派な名前がついたものだ。日本軍がコンニャクで紙袋を貼っていた時、ヨーロッパではアルミニウムをアルダイトで貼り合せて飛行機を作

っていた。ポリエステルとガラス繊維から作られた鉄やアルミニウムよりも強度の高い強化プラスチックで、戦時には上陸用舟艇や自動車の車輪などが作られていた。塩化ビニール、ポリエチレン、ポリスチレン、メタアクリル樹脂、弗素樹脂、珪素樹脂など数多くの高分子物質が発明され、利用されていた。そして、エポキシなる軽金属接着剤が第二次大戦に出現してから、材料、塗料、接着剤の革命時代が始まったのだ。合成樹脂という名で最後に現れたところのノリの一種が、いま鉄やアルミに代りつつある。水道管などはもう鉄で作られなくなった。リベットうちや、電気熔接や釘打ちが省略されて、ノリで接着される。飛行機、自動車、建築物の材料が、そのノリと同じポリエステル系の物質で作られ、またその種の接着剤で組み合される、という時代がいま来かかっている。

真田がそのドアに近づく、三十歳ほどの教師らしい男が、目礼した。彼は軽く礼を返して、そのそばに立った。その男は真田が室内をのぞけるように場所を譲った。見たことのある顔のようでもあったが、思い出せなかった。真田はその時、工場で工具たちの中の小さなボスが、新米の連中を脅かすに使う言葉を頭に浮べた。「おれを知らねえ奴は賈物だ」。この学会での彼の立場は、その言葉の通りになっていた。真田の顔を見覚えていゝるものは、特許マニ

アや山師でなく、多少とも学問につながっている人間だと考えてよかった。この七八年間の急激な高分子学の発達とともに、その構造についての先駆的な研究者として、真田は外国で知られ、それに次いで日本でも学者として著名になった。それまでの彼は、町工場じみた小会社の技師でしかなかったのだ。この二三年来、真田は、講習会や大学の研究室などで、自分の見知らぬ後輩たちに敬意のこもった目で眺められ、集会ではよい席を与えられることに慣れていた。そして、五十歳に近くなった頃から急にふえた白髪と、長年工場で人を使う間に身についた、表情を抑制した顔つきが、そういう敬意を受けるにふさわしい威厳を彼に与えていた。

百人ほど入るその教室で、ノートを前にして喋っているのは、長島研究所の長島省一であった。彼は太った赤ら顔で、短くハアハア息をつきながら、常温硬化型と加熱硬化型との説明をしていた。そのキンキンと響く声は、満員で後方に立っている者のいるこの室内を息苦しくしていた。向う側の、教壇のすぐ下に、この大学の木瀬教授がいた。髪の毛が大分薄くなった木瀬喬作は、真田が大学生のとき同じ研究室の一年下級にいたのだ。卒業後地方の専門学校で、繊維の講義をしていたが、この大学に工学部が新設されたとき、招かれて、新しい学問である高分子学を講義す

ることになった。そして、木瀬喬作は真田を頼りにして、しばしば三立化学の研究室にやって来た。木瀬は、高分子学なるものをほとんど理解していなかった。原理の大部分が不明のまま、実験と試作から帰納される効果というものが研究の大部分をなすこの分野では、誰もが理論上の自信を持つことができなかった。真田のパンフレット「接着力の推計学的考察」を木瀬はこの大学で解説しながら学生と実験しているのだった。

木瀬喬作は戸口のところ誰かが遅れてやって来たのを感じて、目を挙げ、そこに真田佐平の顔を認めた。そして真田の目が彼の目と逢ったとき、木瀬は立ち上って、自分の掛けていた椅子を指差した。それから彼は背をかがめて長島省一の喋っている演壇の下を、首をすくめて通り、入口の人込みを分けて真田を呼び入れようとした。演壇のわきの席は、この分野の権威者か世話役だけが坐るのだ。真田は首を振って拒んだ。しかし、室の人たちの注意が、報告者の長島から離れて、自分と木瀬の小声のやりとりに集中しそうな気配を感じると、真田は木瀬に従った。彼は足音を立てぬように、少し首を垂れて演壇の前を通り、木瀬の席の隣に脚を組んでいる会長の沼田博士の頬のこけた長い顔に軽く会釈してから、その横の椅子に腰を下した。真田がそこへ坐ろうとした時、沼田博士のうしろに久我象吉

の坐っているのが目に入ったが、久我は彼の方に顔を向けなかった。そのことが坐ってから真田の気になった。誰か分らないが、真田の後から、今日の報告者たちの話の要項を書いた四五枚綴じのプリントを差し出した。真田はその人の顔を見ずに、受け取って、頭を下げた。

真田は、そのプリントをちょっとめくって見てから、長島の報告に耳を傾ける態度をつくった。しかし彼はそれを聞き分けるだけの注意を払わなかった。真田は長島のその研究、接着力と熱の変化との関連についての急所は、もう前に長島から聞いて知っているのだった。その実験のデータをいま長島は、学問的なスタイルの中に何とかしてはめ込んで話そうと、その研究報告の形式に専ら力を入れながら喋っているのだった。真田は、人々の注意が長島から離れて自分に集った気配があった時の緊張感から少しづつ抜け出した。そして、ちらと腕時計を見た。二時であった。六時までには終るだろうか。六時に西山幸子に逢わねばならなかった。

西山幸子、十年の後に彼の身邊に現れたその女のことを彼は考えた。彼は長島省一の声を聞きながら、回想の中に落ち込んだ。本当に彼女の子はおれの子供だろうか？ その考が彼を圧迫した。しかし、抜け道がなかった。いやな後味を残したまま、彼はその考から離れて、いまうしろに

坐っている久我象吉のことを考えた。真田は、自分が長い間、母校の教授になつてゐる久我象吉を羨み、妬んで来たことを思った。真田佐平は、久我象吉の地位を羨んだというより、その生れを羨んだのだった。久我は真田と高等学校からの同級生であつた。人造絹糸の化学構造を研究して久我は大学に残り、助手になり、留学から帰って、助教授になつた。そして、その頃から久我は合成樹脂の研究に移つて、学位を取り、教授になつた。戦後は高分子学会の代表的な発言者として、しばしばジャーナリズムに名を出し、学会の実行委員となり、機関雑誌「高分子学」の編輯を實質的に支配してゐた。久我は、母校の官立大学に根強い関懐を持つてゐると言われた上田系の子弟の一人である。明治時代の初期にこの大学の創立に関係した財政家の上田敬一は、その数人の娘たちを、全国から秀才の集るこの大学の優秀な生徒を選んで結婚させた。その間に生れた子供たちのうち、更に女の子は、その次の代のこの大学の秀才たちを選んで娶らせた。それ等の生徒は生活費にも研究費にも困らず、学問の業績をあげた。優生遺伝学の証明のように、頭のよい子や孫がまた生れた。それが三代か四代続くと、この大学の教授の椅子の三分の一ほどは、それぞれ姓を異にしながらも、明治の財政家上田敬一の血を引く秀才たちによつて占められるようになった。それは人工培養さ

れた秀才の一族であり、他の教授たちは日本の各地に突然変異的に生れた偶発的な秀才たちであった。久我象吉はその上田敬一の孫か曾孫かに当たっていた。

久我象吉は額が白く、輝いた目を持ち、頼りないほどひよる長い身体をして、大学の構内を靴をかかえて歩いた。

その動作や表情には、育ちのよさから来る品のよさと、聡明さが漂っていた。避暑地、音楽会、獵、ゴルフというような生活の伴奏をその身邊に持ち、学者として理想的な経歴を踏んで、出世して行く久我象吉を、真田佐平は、町工場がやっと株式会社になったような、三立合板の子会社なる三立化学株式会社の技師として見ていた。借家住居、裏がえした服、十年前からの帽子というような、町工場の一技師の卑屈な生活条件が真田を縛りつけていた。真田は初めは、単に合板の耐水性や経費節約を目標にしてノリの研究をやっていたが、次第に効果を挙げた。それが認められて、戦時中は飛行機用の強化木を合板の理論で作るために軍から経費を与えられた。はじめて彼は三立化学の中に自分の研究室らしいものを作ることができた。その頃から彼は、時々大学へも出かけて、多少研究者らしい待遇を久我象吉から与えられるようになった。久我は、戦前ドイツで手に入れたまま、自分は関心のないまま開いても見なかつた接着剤の研究報告を何冊か真田に貸し与えた。尿素樹脂

を使つての強化木の研究が、飛行機材料の不足とともにもう少しで実用化しそうになった時、戦争が終つた。そして戦後は、飛行機材料としては強化木は考慮の外に置かれ、建築材料として改めて考え直された。

戦争後間もなく、戦時中の欧米の合成樹脂系の研究の目を見張るような進歩が分り、繊維業者、建築業者が海外の特許をもとめて右往左往した時、大学の研究室は何の役にも立たなかつた。学者たちは業者の研究室に立ち遅れそうになった。やむを得ぬ形で私企業の実験室と大学の研究室が協力しはじめた。高分子学というものが大体形をなし、合成樹脂の古い研究家である沼田博士を会長として会を作り、久我象吉が「高分子学」なる研究雑誌を学会の機関雑誌として作り出した時、真田佐平は、久我象吉の協力者として、その雑誌に力を貸した。そして、合成樹脂系の接着剤の接着力と化学構造の關係についての推定的な理論を述べた真田の研究論文がそれに掲載された。しかし学界では誰もそれを批判するものがなかつた。真田のその論文の重要性に最初に言及したのは、久我象吉であつた。そのため久我は真田佐平を半ば自分が庇護している後輩のように扱おうとし、真田もまたそれに調子を合せた。久我象吉が、企業体の研究者たちに向つて、真田の理論を、自分の指導によつて出来たものであるかのように語っていることが、

間接に真田に分って来た。

この分野の研究には物性的なごく基礎的な理論はあったが、実際の接着剤に適用できるような化学構造と接着の本質に関する理論はほとんどなかった。真田は、学生時代から自分の研究のみならず接着性に関係のあるあらゆる文献に載っているデータをカードで分類していた。それは、いっつどのように役に立つものか見当もつかなかったが、彼は町工場の技師として無為に、無名に送るであらうところの自分の生涯の倅しい見透しに、その分類カードによって僅かに抵抗し、慰めを見出していたのであった。それを学校卒業後二十年間も続けながら、時々真田は、これは徒労だ、単なる自己満足の蒐集だと思った。しかしまた時には、そのうちにそれが錬金術のような思わぬ結晶を産み出すかも知れない、と考えた。戦時中に久我象吉から貸してもらった僅かの外国の資料もまたそれに加えられた。真田は、そのカードに載っていない物質と接着性物質との実験を少しづつしては、書き込んで行った。そして、それは戦後流入した多くの資料によって補われた。

それ等の数字の無数のデータから、どういう方法で業績らしいものを抽出できるか彼は分らなかつた。氣象台に勤めている野島勇がある時推計学の話を真田にした。それは啓示であった。真田は数学が得意であつたので、野島勇に

ついて推計学の新しい理論を大体学び取つた。真田は、これまでのデータをそのやり方で処理して、当時新しい学問として注目され出した高分子の構造粘性に関するレオロジック的考察を参考にすれば、色々な接着剤の性質を数式で示すことが出来ると思ひ、戦後三年ほどそれに熱中していたのであった。それが「高分子学」の第一号に発表された彼のたどたどしい英文の論文であつた。久我が学位を請求して見ては、と言つてくれるかも知れない、と真田は思つたが、その気配は遂になかつた。そのうちに、アメリカの学者からその雑誌をもつと送つてほしいという問い合わせがあり、それについてフランスやスイスから賞讃の手紙が来た。そして、一流のK新聞のその年の學術賞が真田のその論文に与えられた。真田を推したのは、合成樹脂の粘着成分の分析的な研究を長いこと続けた旧師の沼田博士であつた。沼田博士は、その新聞の賞の銓衡委員をしていたのだった。その頃沼田博士は教授の席を久我象吉に譲つて、名誉教授としての地位しか持つていなかった。ちょうど大学制度の変革期で、大学院で教える資格を教授たちに与えるためには学位を持たせる必要があつた。論文めいたものさえ提出すれば、今のところ、教授会議は簡単にその人々に学位を与えろのだ。学位を手に入れるのは今のうちだった。しかし沼田博士は久我をはばかり、真田を推さなかつた。真

田を推すことは、真田に大学院の講師の席を一つ与えるように暗示することとなりはしないか、という気配があった。

そして真田は、町工場の技師という地位に安定感を抱いているような顔をしていた。新聞社の賞や海外の反響などというものが、大学に籍を持つ学者たちの嫉妬を招いていることが、その時真田佐平に分っていた。自分を包んでいるそれ等の思いがけない栄光を、何かの間違いであるかのような態度で、真田は、学者たちの前では地味に素人らしくしているように努めた。「ちょうどいい時に久我君が資料をまわしてくれたんでして」と彼は新聞記者や科学雑誌の編輯者たちに言い、それが久我象吉の言いふらしていることと、口伝での三人目ぐらいの所で合致するように漠然と予定した。そのようにして同輩や専門家たちの根強い嫉妬をそらしていても、後輩たちは、沼田博士の戦前の「接着剤概論」という古い研究の外には、真田佐平のその論文を和訳して出したバンフレット「接着力の推計学的考察」しかこの畑で頼りになる理論がないことを知っていた。そのバンフレットが、諸大学の研究室や企業会社の実験室で唯一の分りやすい手がかりとして、絶えず読まれていることは真田佐平も知っていた。

しかし、真田佐平の身の上の本当の変化は、その後でやって来たのだった。それは、彼の会社三立化学が、その有

名になった彼の名を利用して、シバのアラルダイトやシェルのエポンを凌ぐような効果率を持った軽金属接着剤を作るように真田を駆り立てたこと、そして一年近い実験の後に真田佐平がその試作に成功したことだった。軽金属と軽金属、軽金属とゴムが、ほとんど圧力も加熱もなしに完全に接着した。それはちょうど日本の自動車工業が、戦後の虚脱から立ち直り、朝鮮戦争の車輛修理で駆り集めた熟練工やアメリカ軍の收容解除で戻された工場などを使って、国産自動車の改良に乗り出そうとした時であった。効果率がエポキシ系の外国品と同様であり、値段が三分の一にしか当らない真田の創り出したサンダイトは、自動車やラジオや洗濯機や冷蔵庫などの輸出工業の発展の波に乗って、製造が間に合わないほどの需要があった。三立化学も、親会社の三立合板も、サンダイトの登録を会社の名でするに当っては、国内では革命的なものであったこの製品と、真田のネームヴァリューを高く評価して、目を見張るような待遇をした。五百万円の一時金の外に、親会社の三立合板の株一万株と、ちょうどサンダイトの売り出しに当って増資した三立化学の新株三万株を彼に与えた。そして真田を技師長兼任のまま取締役にした。そのやり方で三立化学は、今後まだ金の卵を産み出すかも知れぬこの技師を、会社の営利組織にしっかり結びつけてしまった。

会社は収益を挙げて、工場施設を拡張し、真田佐平は急に収入と資産を得た。自分が、母校の講座を担当する久我象吉を長い間、羨んでいたことが、本当だったろうか、と思うことがあった。真田佐平とその家族の生活は少しずつ変った。妻の文子は、はじめしばらく、その高収入の生活に慣れず、生活の膨脹してゆくのに抵抗しようとした。真田もその点では用心深かった。しかし、戦後に疎開から戻り、家主に追い立てられて、やっと見つけた隅田川の東側の低地にある借家は、二三度水害に見舞われたし、根太が腐って、家は傾いていた。高等学校を終えて、東京の西方の郊外の女子大学に入ったばかりの娘のたか子は、もっと学校に近い所へ越したい、と言った。生活というものは、どの部分にも絶えず不満や欠点があるのだった。こんな低湿地で、いつまた水害に見舞われるか分らない不健康なところに、よく十年も住んでいたものだ、という考が、水はけの悪い台所で仕事をする文子の頭を支配するようになった。そして彼女は、もし引越すとすれば、どの辺がいいだろう、という空想をするようになり、真田が早く帰宅して、親子三人が食卓を囲む時の話題として、そのことが繰り返された。娘のたか子は、電気洗濯機や、扇風器が家に入り、父が大分思い切って買ったらしい大きな電気冷蔵庫が置かれるようになってから、家の経済が変ったことを敏

感に知っていた。彼女は市内の高台や郊外の静かな住宅地にある友達の家を目に浮べ、家の話が出ると興奮して、それ等の家のことを説明し、自分の好みを主張した。そして、仮定から始まった話が、次第にこの家族を、現実の家を捜そうという気持ちにさせた。

銀行には七百万円ほどの預金があった。銀行ではこのよい得意を放っておかなかった。行員がやって来て、小切手帳をお持ちになった方がお金の出し入れに便利です、と親切に教え、それとともに、半分位は定期預金にされた方がはるかに有利で、利子だけで十万円近くの違いが出て来ると説明した。長い間千円か二千円の金の使い方にも細心に気をつけて来た文子は、そういうまとまった金額の話になると、落ちつきを失った。半分を定期預金にすべきか、三分の二を、というような話を文子が持ち出した。

真田佐平は、それを何となく、うるさいと感じた。自分の研究室での仕事の成果が、突然何百万円かを産み出したのであれば、五万円や十万円のお金に何の意味があるか、というのが彼の実感であった。研究の自然な結果として生れたそんな金には意味はない。研究の仕事にだけ意味があるのだ、と彼は感じた。むしろ彼は、金というものが幸福をもたらすものと分って来たいま、そういう幸福を追い求めて接着剤や塗料で一儲けをはからなかった長い間の自分の

性根の確かさを考え直したところであった。おれは金を追求して生きたのではない、と彼は言いたかった。しかし、結婚以後の長い間の余裕のない俸給生活や、戦時戦後のインフレーションの中で食糧を集めるのに苦労した妻の心に出て来ている絶えず小金を数える習慣を、彼は憐れみの心で思い浮べて沈黙した。もっと機嫌の悪い時であったら、彼は妻を叱りつけただろう。五万や十万の金で俺の頭を煩わすな、と。だが、彼の長い間の唯一の贅沢であった分類カードの補給は、妻のヘソクリの千円か二千円でいつもされて来たものだった。彼はその定期預金の話が出た時、笑って言った。

「家がほしかったら、家を買う分だけは定期に入れられないだろう？」

「そうよ、そうよ。私、パーティーを開けるぐらいの広間のない家なんて、いやだわ」とたか子が目を輝かせて言った。

そして、予期しなかった銀行員の定期預金の勧誘という小事件から、家の話が更に具体化した。今では、もう、自分このままこの家に落ちついていいるのだと真田が言い聞かせたら、たか子は泣き出す、と思わなければならなかった。文子は、三百万円をすぐ動かせる金として残しておいた、と真田に言った。まだしかし、真田は体面にこだわってい

た。おれは金儲けを考えている人間ではなかったのだ。だから、金ができるのを待ちかねていたように、気の利いた洋風の書斎や広間のある家に引越して幸福そうな顔をするのは、みっともない事だ。と思った。その上、彼が、シバ会社の製品を凌ぐような軽金属接着剤を、特許を侵さずに作れたというのは、ほとんど偶然なのであった。それは、刑事が尨大な指紋の記録をさがすような努力で、真田が長年蒐集した何千枚かの記録カードを捜すうちに、偶然見つけた珍しい高分子のイソシヤナートラジカルとベンツォール・ケルンの相互効果による着想だった。その偶然的発見が、理論家としては国際的に知られる存在になった真田佐平を、実験家としても一流の存在である、と証明してくれたのだ。もし、あの時、あの構造式を見過したら、彼は接着剤の分野で推計学的理論家として著名なだけで技師としては無能な存在として、軽視されながら、今の会社に勤めつづけるか、私立大学の教授をするかして、貧乏な生涯を送ることとなったに違いないのであった。その偶然性の上に居直って、居心地のよい家庭生活を築くことは、彼の学者としての誇りがゆるさなかった。

しかし娘のたか子の夢想は、重役で有名な学者でもある父にふさわしい家を持って、そこに友達を招待する、という風に、自然に発展し、具体化していた。それが分るとと